

創刊号 2012.11.1 発行
 発行者：株式会社協進印刷
 編集者：JO 編集委員長 石井健太郎

産んでくれてありがとう！って、 みんなで応援できる社会にならないかなあ。

特定非営利活動法人びーのびーの 畑中祐美子さん



●特定非営利活動法人びーのびーの
 「地域で共に育ち合う子育て環境づくり」を目標として、主に0～3歳児までの保護者を対象に、港北区地域子育て支援拠点「びーのびー」や親のひろしなどの広場の運営をはじめ、各種情報提供事業なども行っています。
<http://www.bi-no.org/>

江森：子育て支援の現場から見ると、現在の子育てを取り巻く環境はいかがですか？

畑中：女性が一生のうちで子どもを一人産むか産まないかという時代になってきているにもかかわらず、せっかく産んだ人に「良かったね」とみんな祝福して応援するという雰囲気になっていないということに、私だけではなくこの仕事に携わっている人はみんな危機感を持っていると思います。隣の家に子どもが産まれたら「うるさくなるなあ…」とか、電車に乗っても「あゝあ、子どもが乗ってきちゃったよ」というような残念な空気があって、もっと「産んでくれてありがとう」って、どうしてならないのかなあ…と。

江森：私も含めて反省しなければいけないことですね。びーのびーのとしてはそういう風潮に対してどのように臨んでいますか。

畑中：それぞれの施設ごとにいろいろな考え方がありますが、私たちはお母さんたちに「教

える」のではなく、せっかく産んでくれたんだから後は私たちに任せて！という気持ちでいます。そうやってお母さんに少し楽をしてもらって、仕事に戻るもよし、もう一人産むもよし、そうでなかったとしても子育てが大変で虐待に走ってしまうぐらいなら、私たちが全部やっただけでいいというぐらいの気持ちでいますね。

江森：政府や地方自治体の予算は十分に確保できているのでしょうか？

畑中：消費税の増税分は子育てに使うと政府は宣言しているので今後さらに増えてきます。しかし一方でテレビの街頭インタビューなどを見ていると、必ずしもみんなが理解してくれているわけではないということもわかります。大事な税金を預かる私たちとしては、予算の使い道についても積極的に提言していかなければならないと思っています。

柱にしてください。他の事業に比べれば十分に予算も確保されていると思いますが、使い方としてもっとこうすればというのがあります。

江森：なるほど横浜は恵まれているんですね。でも疑問に思うんですけど、いわゆる問題を起こすようなお母さんって、子育て拠点のようところには来ないんじゃないですか？

畑中：そうですね。だいたいそういう人って保健所の健診に来ないってところで発覚するんですが、保健師さんが訪問しようとしてもだいたい断られます。じゃあ、そういう人の見守りは誰がするのか？っていうことなんです。そのあたりの情報については個人情報保護の壁があって特に行政機関との連携が現在、有効にとれているとはいえない状況だと思います。民生委員さんもそうです。地域で子育てを支援する立場として虐待予防の観点からも、もっと私たちにできること、果たすべき役割があると思っています。た

だ、来ている人が問題がないかということでもない、一見普通に明るいお母さん、お父さんを見ていても、スタツとおしゃべりができるような関係性になってきたときに、ようやく実は…と深い悩みを吐露されたりすることはよくあることです。そういう意味でも、拠点に来られている親子と丁寧に関わることで、そのことを大切に取組んでいます。

江森：最近若者のホームレスが増えているそうですね。彼らの特徴として支援を申し出ても「こうなったのは僕の責任なので、自分なんとかしますから結構です」と断られることがあるという話を聞きました。もしかしたらお母さんたちにも同じような感覚があるのではないのでしょうか？

畑中：挫折を経験してはいないというか、「がんばれば何でもできるワタシ」みたいな思い込みがあると思うんですよ。晩婚だし。実際に「きかない」なんてカッ「悪くて言えないって」保護者の方

もいて弱みを見せたくないかなと思います。

江森：思い通りにならないことが受け入れられない人が多いのかもしれないねえ……。子どもなんて思い通りになるわけないんだけど（笑）

畑中：だから「なんでもありなんだよ」ってメッセージを意識して出すようにしています。例えば

「十時〜十二時のプログラムがあったとして、私たちはお母さんたちが十時ぴったりに集まってくるなんて思ってないですよ。だって出かけようと思ったら子どもが泣き出したとか、寝ちゃったとか、そんなの当たり前のことですよ。だっどはじめて子どもを産んだばかりのお母さ

んは「十時に行けない！」ってなっただけでパニックになっちゃって……。だからこそ「なんでもありなんだよ」って言ってあげて「なんだそれでいいんだ」って納得する経験が大事なんだと

からは、乳幼児期が大事だからこそ「子どもをお母さんから自由にしてあげて」って言われまね。今や逆上がりの家庭教師とか、かけっこの家庭教師とか珍しくなくなっちゃいましたよね。現実には子どもを自分の思い通りに管理したいという願望が強いのです。一方で子どもはたまにはサボりたいのだけど、ケータインで居場所がわかっちゃう時代ですから、サボることすらできない。そうこうしているうちにお互い息が詰まってきちゃう。結局最後に子どもの幸せとなって返って行けばいいことであって、必ずしもいま、親子だけで日々を過ごすことが子どもにとってよいことではないということを伝えていきたいですね。子育て期はいろんな人とかかわりの中で親も子どもも過でしていいと思います。

女性が社会でもっと活躍できるようにするために、子育てと企業の間を橋をかけることが必要だと思っんです。



ると思っっています。

江森：確かにそのような支援体制が整うのは良いことだと思っのですが、整えば整う程、異なる世界がもっと強固になっていくような……。子育て支援はもっとオープンであるべきではないでしょうか？

畑中：そうですね。子育て拠点だけが居心地の良い場所であってはいけないと思っっています。地域の方をはじめ、子育て以外の施設とも交流できるように意識してプログラムを組んでいます。

江森：そのあたりで企業が関わること、役に立てることがあるのではないかと思っっているんですよね。

畑中：先日ハローワークの方に来ていただいて「キャリアアップ講座」をやったらすごい反響でした。いまはお母さんも働かなければ食べられない時代になってしまっったから、関心は高いですね。幼稚園よりは保育園志向です。

江森：日本の雇用政策にはいまだに工場のライン中心の考え方が色濃くて、子育て中のお母さんが中途半端に働いたら生産性が落ちると思っ込んでいるのです。でも障害者が入ると生産性が上がるという研究もあるように、実際には弱

い立場の人を気遣うことで仕事の仕方にも工夫が生まれるので、必ずしも生産性は下がらない。子育て中のお母さんたちにも働き方の選択肢が増えるような社会を作っていくために、細くてもいいから子育てと企業をつなぐ橋を架けておくことが大事なのではないかと思っます。お母さんのインターシップなんていう企画があってもおもしろいですよね。

畑中：それがお母さんのためだけのものではなく、子どもためにもなることであれば良いと思っます。〇〇三歳期に子どもらしく親子で過ごすということもまた大切なことですから。

江森：やはり三つ子の魂ということですか。

畑中：あまりに皆が権利を主張して何でも役所に押し付ければ税金も上がっってしまうわけですし、小さな政府でやっていくためには「お互い様」で片目つぶって、少しずつ分担してやっていくしかないはずですから……。多様なステークホルダーと協力し合っってやっていくことよということを発信していけたら良いと思っます。

江森：過度な自己責任社会の影響もあるでしょうが。

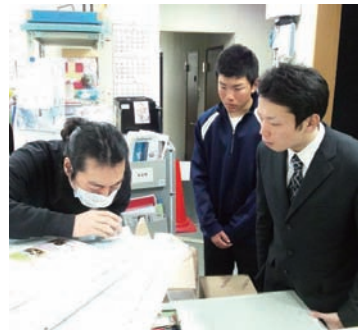


●聞き手 江森克治（えもり かつひ）
株式会社協進印刷代表取締役。本業の傍らNPO法人横浜スタンダード推進協議会理事長、横浜型地域貢献認定委員などを務め、社会と企業との関わりに注目し、CSR（企業の社会的責任）の普及啓発を進めている。

デザインで横浜を元気に！ Cool Yokohama Project 進行中！

「デザインで横浜を元気に！」をコンセプトに横浜市内でデザインやマンガなどのクリエイティブワークを勉強している学生を対象に実践的な学びの場を提供しているクール・ヨコハマ・プロジェクト。今年一月から約十ヶ月間の活動を報告します。取り組みの形態は様々で、インターシップ5件・学内コンペ1件・産学共同研究1件・アルバイト2件となっています。内

容は会社案内のデザインをはじめ、販売キャンペーンの企画・制作・実施、キャラクターデザインやマンガ制作等とこれも多岐にわたっています。参加いただいた企業様も電子機器販売会社、ギフト販売会社、プロマジシャン、保険代理店、ネイルサロン、NPO法人等々、多種多様な業種の企業様に参加していただきました。



協力いただいた担当者様からは「これまでと違う視点に気づかせてもらった」「学生の柔軟な発想が大変参考になった」と改めてデザインによる力を再認識したという声を伺いました。参加した学生からも「就職活動に活かせるアピールポイントができた」「自分の進みたい方向がはっきりしてきた」「改めてデザインの

重要性に気づいた」等々ここでの経験が大いに役立っている様子で、この活動を始めて本当に良かったと思っています。私達は今後もこの活動を通じて、横浜から少しでも多くの若いデザイナーやクリエイターを地域社会で育み、活躍できる裾野を広げていきたいと考えております。尚、現在課題（テーマ）を提供していただける企業様を募集しております。詳しくは弊社まで、お気軽にお問合せ下さい！
担当：山口正規
yamaguchi@koshin-print.co.jp
Facebookページで活動内容を更新中！
<http://www.facebook.com/coolyokohama>

モノづくりの ある街の

第一回 「瑞江」

文・写真 竹見正一

このコーナーでは、印刷屋営業という建前で日々走り回っている竹見が、心地良いと感じる町と人、そして今も力強く輝くモノづくりの現場を紹介してきたいと思います。つたない話ではございますが、どうぞお付き合いください。

今回訪れた町、瑞江。江戸川区の新中川と江戸川が出会うあたり、地図を見れば、びっくりするほどきれいな基盤の目です。京葉道路からは何度も訪れた町なのですが、今日は電車ですので、全く違う景色を期待し興奮します。都営地下鉄瑞江駅の改札を抜け、ながいエスカレーターを上りきったら、左右に分かれたピロティがお出迎え。向かうは右方面。ロータリーは左方面なので、こちらはいわば裏駅。表と



違い、エンジン音はほとんど聞こえません。歩きはじめると、出迎えてくれたのはチェーンの牛丼屋や中華屋、町の定食屋に居酒屋。時刻は15時半。店内もひっそりと、ゆったりした時間が流れているようです。商店街の角を曲がると、急に閑静な住宅街が。ん、こんなところだったっけ？と不安を抱きつつ、次の角を目指します。「よく迷われるのですよ、似たような風景で」と、本日の目

的地、プロセスコバヤさんの従業員の方向が仰つてました。なるほど。綺麗に区画整備されて、どの交差点も、美しい直角を描いています。各交差点までは、均等に50メートルくらい。少し考え事をすると、あれ、何本目だったっけ、となつてしまひそうです。慎重に角を数え、ほんの5分でプロセスコバヤさん到着。



<http://www.pro-koba.co.jp/>

アクリルやビニールにも印刷できます。印刷面を厚く盛り上げたり、その中にラメを仕込んでキラキラ印刷も可能です。今回のお仕事は、紙の質感が消えるくらい、濃く印刷することが目的でしたので、即シルク印刷に決定しました。盛りの最大値や見当の幅、紙への浸透性などを人念にチェックし、打ち合わせ終了。次は、年賀状でフロッキーや発泡を提案してみます！と意気込みを伝えた後、すこしだけ町の話ヒアリングさせて頂きました。



担当の小林さんのおはなしによると、25年前は周りに畑がなく、今の風景は全く想像できなかったそうです。地下鉄が走り、駅ができた途端、たくさんあった畑が一気に住宅地になったと仰っていました。そんなお話をうかがいつつ、頭の中で歩い

てきた道を振り返り、住宅街のレイヤーを外してみたら、土の香りがしたようで、なぜか、おながが減ってきました。打ち合わせと見学をさせて頂き、ありがとうございます。と、プロコバさんとお別れし、外にでてみると、16時過ぎなのにもう日差しが茜色。肌寒さを感じながら、駅へ向かうと、行きの景色には無かったはずの屋台が出現！おじいちゃんの店主が忙しそうに開店準備をしています。ぐっぐつ湯気がおい立ち、「大根とたまごーっ」とビール！って言いそうになりましたが、この後も打ち合わせが続くので、大人としての社会との契約に心を折りました。なんだか、不思議な町、そんな今日の瑞江でした。

線路と街と 大口駅の昔と今

文・写真 石井健太郎

我が地元の足、JR横浜線は、東神奈川駅を起点に、東京都の八王子までを結ぶ42・6kmの近郊路線です。かつては長野産の生糸を横浜港へと運ぶ貨物路線として栄え、横浜のシルクロードとして横浜の発展を支えてきました。現在もハマっ子の足として君臨し続ける横浜線ですが、周辺の他線に比べるとスポットが当たることが少なく、線名のわりに何かと後回しにされやすい地味な路線として、すっかり定着してしまっただけ感があります。遠方から新幹線でやって来て、新横浜駅で乗り換えた人たちは、「横浜駅まで行かない横浜線」に驚くそつです。

僕が協進印刷に入社した2008年に、横浜線はちょうど開業100周年を迎えました。それまでは乗る機会の少なかつた横浜線も、通勤で毎日乗り続けているうちに、愛着が湧いてくるものです。過去に様々な車両が充当されてきた横浜線ですが、現在は1990年に投入された205系という電車が現役に頑張っています。中には山手線のお古も混ざったりしているのです。東神奈川駅で、



京浜東北線の最新型車両であるE233系から、国鉄型の車両である横浜線の205系に乗り換えると、時代が遡ったような気分になります。乗っている乗客の人たちも、心なしか穏やかに見えてくるのは気のせいでしょうか。東神奈川駅を発車した205系電車は、京浜東北線では聞くことができなくなってきた古いモーター音を響かせ、長い陸橋でJRの先輩路線たちを一気に跨ぎながら西へと進路を変えます。神奈川区の台地に突っ込み、高架だったはずの線路はいつの間にか地平と同じ高さになって、一つ目の小さな駅に到着します。ここが弊社の最寄りの駅、大口駅です。周辺には学校がたくさんあるので、学生さんで毎朝混雑するのですが、東神奈川駅での喧騒が嘘のような、長閑で落ち着いた駅です。長閑にさせている要因の一つに、その駅舎の存在が挙げられます。大口駅舎は、横浜近郊のこんな便利な場所なのに、今でも木造モルタルの建築を保っています。平屋の駅舎というのも、この辺りでは珍しい存在となりました。横浜線では唯一なのだそうですが、白く佇むその貴重な姿を利用客は改めて振り返る事もなく、足早に通り過ぎて行きます。初めのうちは、僕もその一人でした。

大口駅は、1945年の横浜大空襲によって焼失した、日本大学専門部横浜校舎の跡地を譲渡される形で、昭和22年（1947年）12月20日に開業しました。今では考えられませんが、そんな経緯があつて生まれた駅でした。戦後間もなくに生まれ、横浜の復興の一翼を担った大口駅。時代が平成となつた今でも、この大口という街を見続けています。もっとも、現職の駅員の方に大口駅について聞いてみると、「はあ、そんなんですか、古いのは知っていましたけど」といった具合で、まったく張り合ひがないのですが…（笑）。

2014年度に、横浜線も京浜東北線と同じE233系に置き換えるとの発表が、JR東日本からありました。横浜線にとっては明るいニュースなのかも知れませんが、旧友を奪われてしまつたようで、どこか寂しさを覚えます。近代化の波は容赦ありませんが、いつまでも205系が似合う、そんな横浜線と大口駅であつて欲しいと思つています。

皆さんも大口駅を利用する際は、この白い駅舎をじっくり見てやって下さい。平凡な平屋造りの向こう側に、横浜の歴史が見えて来るはずですよ。

大口の名店、名所などを紹介していく「大口自慢」。記念すべき第一回目に登場いただくのは、創業昭和12年の横浜の老舗「横浜醤油株式会社」さんです。無添加で手作り。横浜の醤油を守り続けています。現在もろみの工程は東北の工場に移転しているため、こちらの工場では「火入れ」以降瓶詰めまでを行なっています。横浜市内の飲食店を中心に、一般家庭にもたくさんの方々がいるとか。今一番おすすめの商品は「たべるしょうゆ」。食べるラー油ならぬ、たべるしょうゆとは、気になって早速ひとくち。食べた瞬間に広がる、本物のもろみの香り。白いご飯に乗せて何杯でもいけそつです。是非お試しください！

横浜醤油株式会社
横浜市神奈川区松見町三一一六
TEL:045140119317
FAX:045140119319
http://www.yokohama-syoyu.com



一押し「たべるしょうゆ」。
にんにく味もあります。

横浜醤油株式会社



大口駅から徒歩10分

編集後記

11月に入り、気づけば紅葉の見頃を迎えました。各地の紅葉の様子を伝えるニュースは、色づいた山々と渋滞した道路だったりするのですが、一番印象に残るのは、紅葉狩りをしている観光客の方々の笑顔です。四季の恵みを目の当たりにして出る笑顔は、とても素敵です。自分もその仲間に入りたいとウズウズしては、時刻表と睨めっこしている毎日であります。

この度はJO創刊号をお読み頂き、ありがとうございます。社外報を発行するのは弊社として初めての試みであり、手探りの編集となりましたが、これからも皆様に愛される協進印刷でありたい。そんな思いを込めて社員一同知恵を出し合い、一つの印刷物として形にして、お届けさせて頂いた次第です。

JOは季刊誌として、今後も発行を続けて参ります。次号の発行は新年の予定です。少しでも楽しみにして頂ければ、編集長としての上ありません。弊社並びにJOを、今後とも一層の御愛顧賜りますようお願い致します。また、創刊号を発行するにあたり、沢山の方の協力を頂きました。

日頃の感謝とともに、この場を借りて厚く御礼申し上げます。

JO編集長

東京を旅しよう。

東京を旅する塗りつぶしダイアリー「Paint Out 2013」
Facebookにて公開中。
<http://www.facebook.com/paintoutdiary>

Paint
Out

Diary for Strolling
Around Stations in

